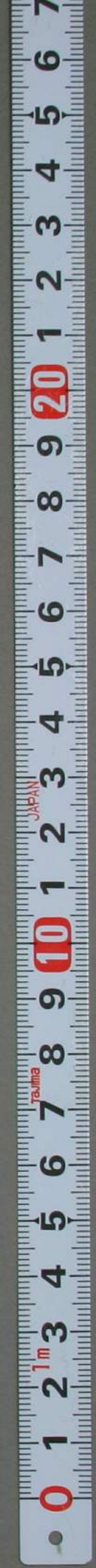




二葉亭四迷原稿
平
凡
六
止

14
4401
6



大正四年十一月十一日
 送川柳二郎氏贈寄

4401
6

時

實まことで
ぞい
。私わかし
は
生せい
来らい
未まい
ご當あつ
て決けつ
心しん
と
し
事こと

ト
廿にじゅう
後のち
子こ
は
人ひと
子こ
一いち
事こと
あ
け
ル
ど
事こと

私わかし
は
其その
時とき
始はじ
て
文ぶん
士し
に
や
ら
う
と
決けつ
心しん
し
と、

平凡

(四十八)

ニ
事こと
あ
る



Handwritten signature in red ink.

紙用稿原聞新日朝京東

らは
は
つと
手紙
が
来
る
、
母
か
ら
注
い
と
手
紙

か
来
る
。
親
達
が
失
せ
し
て
惜
け
な
が
る
面
は
手

紙
の
上
に
浮
い
て
見
え
る
け
れ
と
、
か
う
な
と

妙
に
剛
情
に
な
ら
ず
て
、
因
縁
の
廻
り
に
因
け
れ
て

み
る
。
身
の
白
髪
を
冷
笑
し
て
み
る
。
親
戚
の

別
紙用稿原聞新日朝京東

某
が
用
事
が
有
つ
て
上
京
し
と
序
に
、
私
を
連
れ

て
用
事
を
終
ら
し
め
、
私
は
親
と
し
て
勤
か

せ
か
つ
し
、
そ
こ
で
学
問
の
仁
道
り
は
絶
え
と

か
う
な
は
最
初
か
ら
知
ル
て
あ
な
が
ら
弱

つ
こ
。
仁
心
が
な
い
か
ら
某
大
家
に
違
つ
て
書

紙用稿原聞新日朝京東

つこ
世間の人は皆私の爲に生きそめとや
れしやうな気がして、腹が立って耐らな
断らるて見ると、何ぞう先生夫婦に歌か
言はでもの廣言迄吐いて拒むのどが、かう
思つてあしからう、連ルて行かうとした
口から断代断られと、私は案外だらうと。

紙用稿原聞新日朝京東

ずグツリくとも切らなかつたが、奥さん
生に置いて貰はうとすくと、先生は相言ら
か飽迄不承知で、先生と美搭いて、
●口から断代断られと、私は案外だらうと。
頼めばこつ返事で引受けて呉れとばかり

も一本立かんとうが出で来きるやうになすすと、
急きふにいて

前ま日ひ奥おくさんさんにこりわるる水みづとと時ときの無む念ねんをおももいいて、

夫おとこからは根ね幹かんのお宅たくへも無む沙さ汰たにあららしし。

もう先せん生せいにあららしし用ようはないい。
先せん生せいはあままはあ感かん情じやう

をお宅たく更さらかかるる知しれれなないいが、
先せん生せいがあまま感かん情じやうをお宅たくしし

このかららつて、
世よ間かんがいっしょにあららししては感かん情じやうをお宅たく

しはすすままいいししこの思おぼつつこのではなないい、
決けつして

其その名なはな軽かろいいといふふが、
私わたくしのあららししるるが、
私わたくしのあららししるるが、

結むすりなすすが、
結むすりなすすが、

先せん生せいにあららしし用ようがないいといふふが、
文ぶん壇だんにあららしし用よう

が者るから、私は度く交際し。大抵の難

徳には一人マ二人の知事が出来。かうし

て、交際と度くして置く、私の作が出と時

に、其知事が、~~評~~評判して、呉れ

無倫、感服さす者は一人もな

い。私に感服しては見識に、何か

しら、瑕疵を見付けて、其で自分の見識を

示し、上で、まかし、まあ、うだりの御ど

と云ふ、~~有~~有る時は、~~此~~此を云ふ。私は局

量が、~~此~~批評家の態度が、~~此~~此に能う

誰か評しむせめに
 ざらざらかつしゝん
 座に
 徹高の座に高慢を
 望り込んで、其
 二箇
 度から高慢を
 曖昧な鑑識で
 軽
 率に人の苦心の作と評して、此方の鑑定に
 同五評ひはない、其通り思つて居る、と言は

ぬ
 むかりの高慢の面付が癖に能つて耐ら
 かつし、其と彼此言ふと、句が然
 いと、言はれる。成程其は事實じゃけ
 ど、
 其の言はれるのが厭じから、
 批評家の言

ふ所^{ところ}で流行^{りゅうこう}の場^ばく所^{ところ}と察^{さつ}して、

勉^{つと}め^め其^{その}に

い^いま^まも^も連^{れん}れ^れ後^ごん^んぬ^ぬや^やく^くに^にと心掛^{こころが}けて^てあ^あこ

い^いや^や、心掛^{こころが}けて^てあ^あこ^この^ので^では^はな^ない^い、其^{その}ゆ^ゆな

不^ふ見^{けん}識^し事^じは^は平^{へい}掛^けり^りか^かつ^つこ^こが^が、後^ごか^かう^う私^{わたくし}

の行^{かう}為^みを^を見^みこ^こと^と、心掛^{こころが}け^けし^しに^に、

平^{へい}凡^{ぼん}一^{いち}四^し十^{じゅう}九^く

二^に世^せ不^ふ亭^{てい}

久^くら^らく^く文^{ぶん}壇^{だん}を^を行^{こう}復^{ふく}し^して^てあ^ある^る中^{ちゆう}に^に、あ^ある^る作^{さく}

か^かし^しつ^つニ^ニフ^フ出^で来^ここ^こ、^ここ^こ評^{ひやう}家^かの^の評^{ひやう}は^は等^{とう}と^と同^{どう}

へ^へて^て考^{かう}邊^{へん}の^の佳^か作^{さく}と^と云^いふ^ふ。私^{わたくし}は^は書^かいた^た時^{とき}

紙用稿原聞新日朝京東

には左程子も思はずかつしが、
 然る言われ
 て見ると、
 成程佳作也。
 或は佳作以上で、
 傑作かも知れん。
 礼は不所紛々たる世間の
 批評以外に超然としてみる而色をしてみて、
 實は非難されると、
 非常に堪えかつ

紙用稿原聞新日朝京東

て、少しでも褒められると、
 非常に堪えかつ
 しのい。
 當り仰が
 出てから、
 黙つておても、
 雑話
 社から
 頼みに来、
 書肆から
 頼みに来、
 私に
 強硬に
 感じ
 ので、
 二

紙用稿原聞新日朝京東

で、愈いよくく文学ぶんがくに熱ねつ中ちゆうして、明めいけても暮くれて

言いつてある。批ひ評ひやう家か等とうに存ぞん女にょめられといが一杯いっぱい

つて来きし。で、平へい生せいは眼がん中ちゆうに置おかぬらしく

ては此こゝ評ひやう判はんを隊おとしては大たい変へんといふ心しん配はいも起おこ

だか嬉うれしくて耐たらないが、一いっ方ぱうに

紙用稿原聞新日朝京東

一いっ身しんに業あつまらうてみるやうな氣きがして、何なん

又また評ひやう判はんが好いい。其そのうざうと、世せ間けんの評ひやう判はんは

嬉うれしかつこので、調てう子しに乗のつて又また書かくと、

三さん軒けんかろうの中なかに申まをじが一時いち一寸じゆん業あつまらうて

きな

紙用稿原聞新日朝京東

し文ぶん学の事ことを言いひ慕こらし、眼がん中ちゆう唯ただ文学ぶんがくあり

るのみで、文ぶん学の外ほかには何物なにかもな~~か~~。人ひと生せい

あつての文ぶん学がくではさくして、文ぶん学がくちつての人ひと

とのやうな心持こころもちで、文ぶん学がく界かい以外い以外の人ひと生せいには

らな~~ら~~ど何なんの注ちゆう意いも拂はらはなかつと。如ごとくやう回くわい

紙用稿原聞新日朝京東

家の大だい事じがなつても、左さ程ほど胸むねを御考ごこうなかつ

し其その代しろり、文ぶん学がくで総そう論ろんがゴトリといふと

大地おほち震ゆる如ごとく其そのを感かんじて驚おどぎを感かんずる。之これを

又また其その時ときの怒いかでかり度どいと、つて感かん服ふくす

同どう尖せん味みの人ひと、度どい世せ間かんには無ない。でさか

こので、私わたくしは清華せいけい人ひとが清華せいけいに凝こりこめ、

用もち材ざいとけい気がけがず、念おもひ文學ぶんがくに凝こりこめ、

政治せいざいがけいじ、其その日ひ送おくりの遠とほく仕事しごとぢやない

か？文學ぶんがくは人間にんげんの永久えいきうの仕事しごとじ。老われは

其その高尚こうこうな永久えいきうの仕事しごとに信まちあつた天てんの啓ひらかすこと

其その日ひを新あらためて永久えいきうが別べつにありてもすゝやう

仕事しごとを言いひて、傲おご然ぜんとして一世せいを睥へい睨げんし

てあし。

文學ぶんがく上じやうでは私わたくしは寫實しやじつ主義しゆぎを執とつてゐる。

それ小こ研究けんきうの結けつ果くわ寫實しやじつ主義しゆぎを基きとして寫實しやじつ

紙用稿原聞新日朝京東

味^{あじ}撰^{せん}取^{しゆ}ぬ
 得^えと
 現^{げん}実^{じつ}の^{あじ}味^{あじ}
 如^に實^{じつ}に^{あじ}再^{さい}現^{げん}す^のの^もも

作^{さく}家^かの^{あじ}サ^サブ^ブジ^ジエ^エ
 シ^シク^クウ^ウ井^いキ^キ一^{いち}
 御^ごち^ち之^の観^{かん}に^{あじ}ぬ

實^{じつ}に^{あじ}描^{びやう}写^{しゃ}す^のの^もの^もで^ある[。]
 詳^{くわ}しく^{あじ}言^いへ^ば、

ふ。
 現^{げん}実^{じつ}の^{あじ}(^{あじ}真^ま味^{あじ})
 とは^{あじ}言^いへ^ば、^{あじ}真^ま味^{あじ}を^{あじ}如^に實^{じつ}に^{あじ}描^{びやう}写^{しゃ}す^のの^もの^もで^ある[。]

け^けな^ない。
 如^に實^{じつ}に^{あじ}描^{びやう}写^{しゃ}す^のの^もの^もで^ある[。]
 寫^{しゃ}真^まに^{あじ}ら^るて^す。

紙用稿原聞新日朝京東

別

寫^{しゃ}實^{じつ}之^の我^がは^{あじ}現^{げん}実^{じつ}を^{あじ}如^に實^{じつ}に^{あじ}描^{びやう}写^{しゃ}す^のの^もの^もで^ある[。]

近^{ちか}い^{あじ}見^{けん}解^{かい}を^{あじ}持^もつ^て、^{あじ}此^これ^{あじ}は^{あじ}事^{こと}を^{あじ}言^いつ^てる[。]

寫^{しゃ}實^{じつ}之^の我^がに^{あじ}つ^ては^{あじ}一^{いち}寸^{すん}今^{いま}の^{あじ}自^じ然^{ぜん}之^の我^がに^{あじ}

執^{しつ}ひ^{あじ}寫^{しゃ}實^{じつ}之^の我^がに^{あじ}依^いか^かざ^るを^{あじ}得^えな^かつ^ての^{あじ}た[。]

之^の我^がを^{あじ}執^{しつ}つ^ての^{あじ}で^ある[。]は^{あじ}な^かく^て、^{あじ}私^{わが}の^{あじ}性^{せい}格^{かく}で^ある[。]

のである。

人生は目的ありや、
帰途ありや？
苦悩

事ば人間に
かゝるものでない。
知の力で人

生の意義を掴ま
おとするは狂せ
ずんば、

白紙すうに
流る。唯人生の
味は人間に
味へる。

味つても
味ひ盡せぬ、
又味へば味は

不程味が
旨い。苦中にも
味はあふ。

其の味を味ひ得ぬ
時は自給する。
人生の味は

無味いけれど、
之を味はふ人の
能力に

限りがある。
苦悩するは

紙用稿原聞新日朝京東

は	料	ふ	言	唯
ふ	理	。	へ	人
藝	通	能	ぬ	口
術	は	く	。	皆
家	料	人	能	同
は	理	生	く	い
能	人	を	料	に
く	で	味	理	人
人	な	は	を	生
生	い	ふ	味	の
を	如	者	は	味
経	く	を	ふ	と
理	、	藝	者	味
せ	能	術	を	味
ん	く	家	料	は
で	人	と	理	ふ
も	生	い	通	と
美	と	小	と	は
支	味	。	い	

平凡 (五十七)

二葉亭

私の^{わし}文学^{がく}上の^{かみ}意見^{いけん}も大業^{おほわざい}だが、^が文学^{がく}につ

いては^い先^まち^ち私^{わたし}が^が他^たの^の愛^{あい}の^のま^まに^に事^{こと}を^を考^{かん}え^えて

浮^うれ^れて^てま^まと^と。で^で、私^{わし}の^の意^い

見のやうにふくと、味は、ゆるゆるものは人生

で、味はふるとのば作家の主観であるから、

作家の主観の精粗によつて人生を味はふ程

度に浅深の別がある。是に於て作家は如何

しても其主観を修養しなければならぬ事

る。私は行はば大作家になりといが一生の

預めから、大に人生に飽れて主観の修養を

し、せければ、自然人生に飽れるの

主観を修養するのと言つても中は、意味が

能く分つてゐるやうでも、愈々此を見ても實

別

紙用稿原聞新日朝京東

て 経 常 で も ない し、 文 壇 は 今 解 釈 せ ら れ て あり

か ら 物 に 大 し と 味 有 者 笑 であ る。 と リ つ

実 業 は 人 生 の 一 現 象 で も 考 ら う け れ ど、 其

知 何 手 を 着 け て 好 い か、 考 ら ない。 政 治 や

行 ず る 途 に せ ざ と、 一 寸 ま ご つ く。 何 か ら

紙用稿原聞新日朝京東

し、 ま あ、 社 会 現 象 が 一 番 面白 い。 面白 い

と い ふ の は 甚 處 に 人 生 の 味 が 濃 かい 味 は、

れ づ 習 であ る。 社 会 現 象 の 中 で も 孰 中 男 女

の 関 係 が 最 も 面白 い。 さ う だ が、 其 面白 味

を 十 分 に 味 ば う と す る に は、 自 分 で 實 験

紙用稿原聞新日朝京東

しやサハルばやらん。それは一寸相手に困る。

人の意をすゝるのを停観すゝのは、宛も人が

天鼓を叩つてゝのを親て其味を想像すゝ

やうなものではあゝ々れど、實際の出来ぬ

中は停観すゝより外任方がない。が、新聞が

の記事では輪廓だけで内容が分らない。内

容を知らすゝには、意すゝ男女の間に割込んで、

其意と観察すゝに限るが、意すゝ男女が其

處らに意こちても居ない。すゝと、當分米

中が意の可成を認めてゐる

紙用稿原聞新日朝京東

中が意の可成を認めてゐる

處らに意こちても居ない。すゝと、當分米

其意と観察すゝに限るが、意すゝ男女が其

容を知らすゝには、意すゝ男女の間に割込んで、

の記事では輪廓だけで内容が分らない。内

中は停観すゝより外任方がない。が、新聞が

やうなものではあゝ々れど、實際の出来ぬ

天鼓を叩つてゝのを親て其味を想像すゝ

人の意をすゝるのを停観すゝのは、宛も人が

しやサハルばやらん。それは一寸相手に困る。

紙用稿原聞新日朝京東

若い男女親家して満足して居なければな

らん。が、若い男を親家しとらて請うない。

若い甲かの心持せら、自分で大抵分る。意の

可能をおつてゐる若い士の親家が愛尚の急

務い。と、かう考へ詰めて見ると、私の人

生研完は詰り若い女の研完に帰着す。

で、帰着点はおつとが、矢張実行が困難

じ。若い女を研完するとりつて、往來に衝

立つてゐて通る女に一々溺れしこらん。預力

私の年の毎く所から研完に着手す外は

紙用稿原聞新日朝京東

紙用稿原聞新日朝京東

行	跡	へ	物	し
く	と	ー	と	さ
の	も	イ	言	う
で	別	と	ふ	に
ば	め	尻	と	し
	ず	上		て
毎	に	り	も	あ
り	ド	に	う	う
海	メ	大	何	所
趣	く	き	者	を
味	と	ど	と	提
た	座	声	ん	ま
	敷	で	か	へ
下	を	返	で	て
女	を	事	お	一
が	男	を	手	口
海	出	して	が	二
趣	して		鳴	つ
味			。	

紙用稿原聞新日朝京東

か	う	さん	屋	ま
ト	ッ	は	の	い
女	かり	大	お	。
で	解	抵	神	が
。	れ	年	さん	。
ば	と	を	ん	私
ど	危	吹	や	の
う	険	つ	下	辛
も	じ	て	女	の
吹	。	。	に	届
ひ	。	。	ぢ	く
足	。	。	ぢ	所
り	。	。	。	じ
な	。	。	。	と
い	。	。	。	。
。	。	。	。	。
忙	。	。	。	。
が	。	。	。	。

紙用稿原聞新日朝京東

何村の産の鼻ひりやげか
 どので、私学が
 うん、が、小衣どと、
 柳手が遊後の國蒲原
 掛り流すかり、小衣で満足し、
 圓なけれはせ
 て研実すす外はないう、
 これも大衣は金か
 いとすうと、
 私の身外ではもう賣女に
 認めれ

紙用稿原聞新日朝京東

國さでと、末ど國訛が
 取れないうになう。
 往
 くにして下女にも考う。
 尤も是は少し他に
 用事も考つとから、
 其用事を兼ねて私に
 約
 えず認めれてみるとが、
 かうしても、かう考へ
 て見ても、是では喰ひ足らん。
 どうも素人

紙用稿原聞新日朝京東

房が欲しくならしめた。

紙用稿原聞新日朝京東

の向白い女に撞着つて見とい。今ぞと直ぐ

女学生といふ所だが、其時分は其種なるに

容易に接連さかづかつところから、私は非常に

煩悶してゐる。

馬鹿な事と言つて、私は女

さ ん に 接 近 し や う と す る と 、 心 ち 妙 ザ ハ ソ	が 仕 二 か が ない。 私 は 人 生 の 研 究 の 為 お 糸	に ぎ る 、 お か の ま ま や う て し ま ふ 。 国 つ と も の ご	つ て 、 ま は ま の ま ま で ま く ま う て 、 お か の 自 由	斗 争 の ま ま に ま る と 、 直 ぐ 其 勢 に 制 せ ら れ て し
---	---	--	---	---

思
つ
こ
の
い
わ
れ
と
接
近
し
や
う
と

紙用稿原聞新日朝京東

三	を	に	ふ	に
日	得	あ	番	な
と	ない	覚	障	つ
持	い	提	附	て
と	の	込	け	
ない	は	か	に	ニ
		れ	ぞ	番
	半	て	ろ	さん
直	襟	つ	と	ん
ぐ	二	つ		ど
滑	掛	と	俗	の
え	ば		物	ハ
て	か	又	の	番
又	り	提	共	さん
え	の	込	の	ん
の	効	ま	競	ど
ホ	能	ぬ	争	の
阿	ぢ	ざ	園	と
彌	や	さ	内	い

5

紙用稿原聞新日朝京東

の	を	懐	點	に
時	按	込	う	ヤ
に	い	と	ヤ	う。
、	出	ヤ	う	二
何	し	ら	と	掛
と	て	て	、	の
か	、	二	執	半
好	今	日	に	禮
加	度	二	業	は
減	ば	晩	せ	博
ヤ	畫	も	う	博
口	の	考	れ	し
宜	お	一	と	く
を	糸	と	ま	ヤ
設	さ	末	が	い
け	ん	、	漸	が
て	の	又	々	、
酒	手	一	せ	も
を	際	策	ぬ。	う

事	酒	ら	る	命
も	を	か	、	い
車	飲	酌	お	た
解	ひ	も	糸	酒
解	ひ	し	さ	を
解	ひ	て	ん	命
思	一	笑	が	ず
ふ	は	れ	持	れ
事	、	、	っ	は
を	私	お	て	か
言	に	糸	来	糸
つ	い	さ	れ	さ
て	う	ん	ど	ん
如	て	の	些	か
何	些	お	と	持
す	と	酌	の	っ
す	は	を	の	て
氣	思	、	間	来
ど	ふ		廿	

ち	り	し	角	つ
せ	に	て	井	た
の	や	お	解	か
で	ら	系	け	、
す	ら	さ	こ	そ
ね	と	ん	か	れ
、	。	が	う	あ
と		お	と	あ
神		神	の	分
用		神	で	明
未		来	、	ら
と		て	酒	ら
一		笑	を	た
本		れ	命	け
も		て	い	れ
明		、	と	ど
け		馬	ら	、
		小	、	免
		神	果	子

紙用稿原聞新日朝京東

し	い			吹	ぬ
こ	て			く	中
も	、		大	え	か
め	、		吹	さ	ら
	正		は	ら	
	可		さ		私
好	女		し		は
加	房		と		一
減	子		お		禁
	の		系		に
ぞ	の		さ		編
々	者		さん		に
ヤ	ら		は		や
ラ	人		煙		う
ワ	、		草		て
ホ	思		を		、
コ	い		お		貴
を	ま		ん		女
三	せ		と		は
三	ん		叩		一
に	で				杯
受					

紙用稿原聞新日朝京東

家 <small>い</small>	や	増 <small>や</small>	辰 <small>し</small>	事 <small>ま</small>	け
が	好 <small>よ</small>	し	子 <small>し</small>	が	て
者 <small>あ</small>	い	か	の		
ン	っ	っ	者 <small>あ</small>		仙 <small>せん</small>
ぢ	こ	こ	人		花 <small>はな</small>
や	ん	を	と		く
い	で	せ	知 <small>し</small>		ん
い	す	う	れ		ど
い	け		と		り
い	ど	寧 <small>りやう</small>	時 <small>とき</small>		迄 <small>まで</small>
人		を	に		引 <small>ひ</small>
の	つ	共 <small>とも</small>	や		張 <small>は</small>
元 <small>もと</small>	つ	時 <small>とき</small>			り
介 <small>かい</small>	て	帰 <small>かへ</small>			出 <small>で</small>
に	来 <small>き</small>	つ	如 <small>ごと</small>		さ
や	と	て	何 <small>なに</small>		れ
ち	う	来 <small>き</small>	村 <small>むら</small>		て
て	て	ッ	に		
昔 <small>むかし</small>		了 <small>しま</small>	に		

あはれませう

お身でせい

紙用稿原聞新日朝京東

た か ら い	い ふ		事 が お 神 さ ん に 知 れ て お め の 生 ま り の と	す と 新 の	い ひ や り 次 の 中 に 田 陰 者 の 半 歳	馬 鹿 さ ね え 貴 方	禁 ず す よ か ま 暗 か と 思 つ と も ん で す か ら	あ ら う い は な し て お め の 生 ま り の と
------------------	--------	--	--	------------------	--	---------------------------------	--	--

Red handwritten mark

Handwritten note at the bottom of the table

紙用稿原聞新日朝京東

す		身 <small>しん</small>	は			
か		毫 <small>ご</small>	ら		一	一
ら		と	、		え	美 <small>やう</small>
		棒 <small>ぼう</small>	初 <small>はつ</small>		、	子 <small>し</small>
出 <small>で</small>		に	を		美 <small>やう</small>	ん
ら		振 <small>ふ</small>	言 <small>こと</small>		子 <small>し</small>	で
の		ら	て		ん	す
り	し	あ	ち		で	か
く		さ	さ		す	？
の		や	や		と	、
と		や	、		も	
棒 <small>ぼう</small>		ら	者 <small>もの</small>		。	
め		ん	す		美 <small>やう</small>	
返 <small>へん</small>		で	く		子 <small>し</small>	
し		せ	何 <small>なに</small>		ど	
と		う	万 <small>まん</small>		か	
學 <small>がく</small>		？	と		ら	
句 <small>く</small>			ち			
が		で	し			

に		何 ^ニ	跡 ^キ	入 ^イ	私 ^シ	話 ^ワ
一		ど	と	小	は	話 ^ワ
時	い	う	り	て	お	話 ^ワ
は	井 ^イ	も	の	別 ^ワ	金 ^{カネ}	話 ^ワ
川	井 ^イ	う	目 ^メ	話 ^ワ	で	話 ^ワ
へ		い	に	を	め	話 ^ワ
て		い	邊 ^ヘ	持 ^チ	何 ^ニ	話 ^ワ
も		り	は	お	で	話 ^ワ
お		と	さ	し	も	話 ^ワ
の		逆 ^{サカ}	れ	こ	の	話 ^ワ
ん		上 ^ウ	て	か	と	話 ^ワ
で		せ	、	う	と	話 ^ワ
死 ^シ		ッ	口 ^ク	、	見 ^ミ	話 ^ワ
ん		ろ ^{チマ}	唇 ^{チマ}	私 ^シ	玩 ^ワ	話 ^ワ
ろ		ッ	し	や	ッ	話 ^ワ
は		て	く	も	て	話 ^ワ
う		、	く	う	、	話 ^ワ
か		本 ^{ホン}	く	踏 ^{フミ}	人 ^{ヒト}	話 ^ワ
と		當 ^{トウ}	、	お	を	話 ^ワ

に	も	血				思
野	又	流				ひ
し	ね	は		で		ま
し	ぬ	泡		す		し
も	ん	え		と		と
	ん	ゝ				よ
海	親	下				し
ま	達	せ		私		
子	は	い		が		
い		い		ん		
と		い		ち		
思		い		ま		
つ		い		や		
て		い				
		は		幸		
無	切	は		年		
分	ん	御		厨		
別	へ	先		の		
は		祝				
出	心	杯				

紙用稿原聞新日朝京東

は	い	な	か	く
ず	何 ^{なん}	お	ら	ま
に	か	金 ^{かね}		せ
	言 ^い	ぢん	手 ^て	ん
頭 ^{あたま}	つ	ぞ	地 ^ち	で
の	て	に	金 ^{かね}	し
物 ^{もの}		何 ^{なに}	も	と
が	タ	月 ^{つき}	出 ^で	ハ
ん	ン	を	さ	と
か	カ	くれ	う	
貢 ^{こう}	を	に	と	係 ^{けい}
飛 ^{とび}	切 ^き	ま	言 ^い	き
で	つ	お	つ	り
し	て	糸 ^{いと}	と	口 ^{くち}
て		さん	の	拷 ^{こう}
踏 ^{ふみ}	一	ん	を	し
銀 ^{ぎん}	文 ^{ぶん}	ぢ	、	か
に	も	や	そ	つ
	費 ^{たい}	や	ん	と

		ぬ		ま		ス		日
		え		せ		ワ		帰 ^マ
		レ [。]		ん		テ		つ
				か		ン		て
				と		く		来 ^キ
				い		く		と
				ふ		で		ろ
				始 ^シ		。		好 ^ヨ
				末 ^{マツ}		塔 ^{カミ}		か
				て		塔 ^{カミ}		つ
				す		鏡 ^{カミ}		と
				の		も		け
				さ		伯 ^{カミ}		ど
				。		母 ^{カミ}		、
				馬 ^{カミ}		さ		昔 ^{カミ}
				鹿 ^{カミ}		ん		代 ^{カミ}
				て		。		り
				す		海 ^{カミ}		今 ^{カミ}
				わ		み		は ^{カミ}

フ
イヤ、
向^{カミ}
白^{カミ}
い
氣^{カミ}
氣^{カミ}
氣^{カミ}
ど^{カミ}
レ[。]

海^{カミ}
種^{カミ}

昔^{カミ}
代^{カミ}
り
今^{カミ}
は^{カミ}

紙用稿原聞新日朝京東

り	情 ^{じやう}	の	の	ま	但 ^{たん}	一			
や	な	や	の	ま	那 ^な	七			
、	み	う	や	う		す			
御 ^ご	と	な	者 ^{もの}	な		か			
衣 ^い	や	者 ^{もの}	の	ほ		ら			
で	し	の	相 ^{あい}	し	親 ^{おや}	は			
す	し	相 ^{あい}	手 ^て	い	親 ^{おや}	も			
三 ^{さん}	む	手 ^て	二	お	は	う			
御 ^ご	か	二	ヤ	ろ	界 ^{きがい}	界 ^{きがい}			
衣 ^い	し	ヤ	る	も	は	微 ^い			
む	ざ	る	し	者 ^{もの}	は	と			
す	ん	し	で	り	微 ^い	と			
す	で	す	す	ま	の	の			
し	す	わ	る	す	の	の			
	わ	。	る	け	す	。			
	。		る	ど	す	。			
			る	ど	す	。			
			る	ど	す	。			
			る	ど	す	。			
			る	ど	す	。			
			る	ど	す	。			
			る	ど	す	。			
			る	ど	す	。			

是^{これ}の^{もの}を^まい^はす^けじ^ど。

そ^のや^あは

紙用稿原聞新日朝京東



		ま		て			
		せ		、			
		ろ		お		ま	
		。		火間 <small>かん</small>		あ	
				が		、	
				全 <small>ぜん</small>		い	
				然 <small>ぜん</small>		か	
				冷 <small>れい</small>		の	
				廻 <small>まわ</small>		時 <small>とき</small>	
				う <small>う</small>		を	
				つ		せ	
				と		お	
				。		徒 <small>と</small>	
				一 <small>いち</small>		た	
				寸 <small>すん</small>		た	
				並 <small>なみ</small>		か	
				し		し	
				て		て	
				あ	<small>ま</small>	あ	
				り	<small>り</small>		

御志ごしでですす。

まあ、いかにこの時をせお徒たかしてあ

私 <small>わたくし</small>	会 <small>こい</small>	お	平凡 一五十八
が	で	系 <small>い</small>	
学 <small>がく</small>	一 <small>いち</small>	さん	
福 <small>ふく</small>	寸 <small>すん</small>	が	
を	回 <small>くわい</small>	お	
了 <small>りょう</small>	え	お <small>火筒</small>	
一 <small>いち</small>	の	と	
行 <small>ぎょう</small>	事 <small>こと</small>	互 <small>あひ</small>	
せ	情 <small>じょう</small>	一	
ら	と	に	
れ	吹 <small>ふい</small>	起 <small>おこ</small>	
こ	箱 <small>はこ</small>	つ	
時 <small>とき</small>	し	際 <small>いば</small>	
父 <small>ちち</small>	て	に	
が	置 <small>お</small>		
学 <small>がく</small>	く		
子 <small>こ</small>	の		
立 <small>た</small>	管 <small>かん</small>		
の	て		
任 <small>にん</small>			

二葉立了

で	に	非 ^い	て	え
も	論 ^{こと}	一	、	こ
と	し	夜 ^ど	も	と
も	て	帰 ^き	う	と
言 ^い	笑 ^く	者 ^{せい}	小 ^{せう}	も
葉 ^か	れ	し	説 ^{せつ}	。
わ	と	て	家 ^か	の
て	。	兩 ^{りやう}	に	父 ^{ちち}
、	さ	親 ^{しん}	や	が
私 ^{わし}	う	の	う	見 ^み
は	言 ^い	心 ^{こころ}	な	え
昔 ^{むかし}	を	を	と	。
時 ^{とき}	小 ^こ	あ	は	。
伯 ^{おや}	て	め	言 ^い	。
父 ^{ちち}	見 ^み	ろ	は	。
に	る	と	ぬ	。
連 ^つ	と	、	、	。
れ	、	怒 ^い	唯 ^{ただ}	上 ^{うへ}
ら	夫 ^{それ}	ろ	是 ^ぜ	京 ^{きやう}

十行二十

い	で	如 ^{ごと}	て	送 ^{おく}
て	、	何 ^{なに}	東 ^く	り
、	兩 ^{りやう}	に	く	と
父 ^{ちち}	親 ^{しん}	か	か	と
の	は	か	と	つ
白 ^{しろ}	婿 ^{むこ}	う	思 ^{おも}	こ
髪 ^{かみ}	子 ^こ	に	つ	の
も	と	か	し	は
共 ^{とも}	玉 ^{たま}	取 ^{とり}	か	。
時 ^{とき}	や	續 ^{つづ}	ら	。
分 ^{ぶん}	し	い	い	。
僅 ^{わずか}	ま	て	と	。
の	し	帰 ^{かへ}	こ	。
向 ^{むか}	と	ら	ろ	。
に	や	ず	が	。
減 ^へ	う	か	が	。
切 ^き	子 ^こ	つ	。	。
り	美 ^み	ら	私 ^{わし}	。
延 ^の	欠 ^{かけ}	の	が	。

今

ゆ	へ	言	六	と
を	せ	を	う	不
抱	て	ぬ	し	咄
當	か	、	い	つ
に	ら	お	事	て
入	二	お	は	物
れ	三	の	は	と
て	年	思	ひ	と
信	許	ふ	ら	父
り	り	通	ら	は
と	間	り	、	若
全	に	み	、	者
じ	建	し	、	の
。	つ	ろ	、	七
子	こ	じ	、	に
は	全	が	、	は
無	は	、	東	茶
學	、	京	、	屋
で	比			の

三美の練
 敢て
 茶屋
 然るに

十行二十

し	の	貴	心	れ
と	ぢ	い	配	て
の	や	所	を	久
じ	せ	以	掛	松
、	い	を	け	を
隠	、	説	と	停
あ	文	いて	説	者
ん	学	て	を	し
ぞ	に	福	す	と
と	於	かせ	所	が
思	て	せん	か	、
も	向	、	父	の
れ	上	私	の	面
て	の	は	を	を
は	一	隠	見	る
心	路	あ	よ	り
外	と	し	の	
ど	看	と		

卒
 先
 づ
 文
 学
 の

今

し	債	も	し	そ
山	却	當	時	は
の	して	は	には	始
金	て	ず	は	迄
額	見	か	、	其
と	せ	つ	私	が
も	と	た	も	苦
極	や	け	妙	に
り	ろ	れ	が	ぞ
て	に	ど	心	ろ
井	廣	、	猜	て
び	言	其	か	の
出	吐	式	し	と
京	き	の	。	服
し	、	負	で	を
こ	月	債	、	瞬
が	々	は	何	か
、	な	直	子	ル
		き		

十行二十

で	先	の	見	働
を	礼	道	見	さ
び	の	を	見	が
う	遠	立	見	な
も	見	て	い	い
お	と	、	。	か
位	人	笑	。	ら
解	手	ル	。	、
に	に	之	。	こ
対	濟	を	。	の
し	さ	償	。	手
て	な	却	。	で
も	ば	せ	。	は
濟	ず	ん	。	到
ま	ら	暗	。	底
ぬ	ぬ	には	。	も
か	。	は	。	返
ら	。	、	。	せ
、	。	。	。	。

今

こ	其	か	て	た
が	其	つ	ら	け
	一	と	ふ	れ
そ	寸		の	ど
ハ	學	父	で	
ル	校	は		夫
直	の	疾	少	と
と	事	う	し	て
罷	分	に	も	も
め	員	縣	家	残
ら	の	願	計	ら
ハ	や	の	の	ず
て	う	方	是	次
全	事	も	一	債
く	事	罷	に	の
収	も	め	は	方
入	し	ら	ぢ	一
の	て	れ	う	入
道	あ	て	ぢ	れ

十行二十

ら	に	は	上	出
は	就	は	上	京
原	い	は		し
福	い	室	小	て
科	の	約	遣	見
の	は	束	も	ふ
手	當	に	餘	と
に	り	ぢ	計	
入	作	ら	に	物
る	が	て	入	價
度	出	う		賤
に	束	つ		貴
る	て	と	欠	に
少	か		債	付
の	ら		債	き
送	で		却	下
金			の	宿
は	夫		約	種
し	か		束	は

今

鏡 <small>かがみ</small>	ル	ル	垢 <small>あか</small>	も
を	く	対 <small>たい</small>	の	手 <small>て</small>
掛 <small>か</small>	巻 <small>まき</small>	の	汗 <small>あせ</small>	傳 <small>つと</small>
け	に	飛 <small>かた</small>	いと	つて
、		白 <small>しろ</small>	と	、
保 <small>たも</small>	し	の	物 <small>もの</small>	、
福 <small>ふく</small>	、	銀 <small>ぎん</small>	に	矢 <small>や</small>
種 <small>たね</small>	左 <small>ひだり</small>	仙 <small>せん</small>	せ	張 <small>はり</small>
と	程 <small>ほど</small>	物 <small>もの</small>	せ	葉 <small>は</small>
手 <small>て</small>	要 <small>ひつ</small>	で	よ	大 <small>だい</small>
に	く	、	、	家 <small>か</small>
入 <small>い</small>	ル	縮 <small>ちぢ</small>	気 <small>き</small>	の
ル	な	縮 <small>ちぢ</small>	に	や
と	い	の	角 <small>かく</small>	う
時 <small>とき</small>	眼 <small>め</small>	兵 <small>へい</small>	羽 <small>う</small>	に
ど	に	既 <small>すで</small>	織 <small>おり</small>	、
け	金 <small>かね</small>	帯 <small>おび</small>	ル	假 <small>かり</small>
、	糸 <small>いと</small>	を	着 <small>き</small>	令 <small>しやう</small>
急 <small>きふ</small>	眼 <small>め</small>	グ	物 <small>もの</small>	禱 <small>いた</small>

十行二十

急 <small>きふ</small>	共 <small>とも</small>	り	の	が
に	頃 <small>ころ</small>	を	物	絶 <small>と</small>
氣 <small>き</small>	新 <small>しん</small>	拙 <small>せつ</small>	は	え
か	進 <small>しん</small>	、	、	こ
た	作 <small>さく</small>	、	、	の
ま	家 <small>か</small>	、	、	で
く	で	、	父 <small>ちち</small>	、
ず	多 <small>おほ</small>	と	も	、
り	少 <small>せう</small>	云 <small>い</small>	母 <small>はは</small>	、
、	愛 <small>あい</small>	ふ	も	、
を	出 <small>い</small>	。	辺 <small>ちか</small>	、
ル	し	、	頃 <small>ころ</small>	、
に	と	、	は	、
天 <small>てん</small>	頃 <small>ころ</small>	、	内 <small>うち</small>	、
性 <small>せい</small>	、	、	臟 <small>ちやく</small>	、
の	、	、	に	、
見 <small>み</small>	と	私 <small>わが</small>	親 <small>おや</small>	、
京 <small>きやう</small>	か	は	世 <small>よ</small>	、
坊 <small>ぼう</small>	、	、	、	、

今

手	も	素	撫	活
に	手	不	を	字
入	傳	振	撫	子
と	て	か	つ	の
		れ	て	耳
		て	ら	に
直	急	は	さ	入
ぐ	に	條	う	つ
多	々	り	ど	て
十	餘	名		一
の	餘	譽	一	寸
送	と	で	珍	を
全	出	ら	い	と
し	他	夫	ね	親
て	の	夫		遠
	物	を	お	は
	を	振	お	は
親	世	心	と	世

に	職	丈	名	衣	に
は	に	の	の	へ	下
	親	氣	さ	行	宿
又	世	大	ん	き	め
妙	撫	を			後
や	を	吐	え	と	を
心	撫	い		め	不
行	〇	て		先	味
が		み		に	が
し	と	と		麦	う
と	い	い		酒	て
茗	ふ	か		泡	近
し	手	ら		を	所
此	紙			着	の
事	と	雨		け	西
が	夫	親		て	洋
六	の	が			料
子	時	内		萬	理

ん	回	ん	ま	し
に	へ	の	ま	め
は	の	身	ま	が
し	送	上	ま	が
て	金	話	ま	が
又	は	と	ま	が
敬	此	福	ま	が
意	次	く	ま	が
を	に	と	ま	が
表	上	ふ	ま	が
さ	期	と	ま	が
う	し	お	ま	が
か	、	出	ま	が
と	、	ひ	ま	が
思	室	出	ま	が
つ	平	ひ	ま	が
し	を	し	ま	が
し	お	て	ま	が
。	系	、	ま	が
が	と	、	ま	が

7

と	ま	料	で	撫
、	か	料	で	ど
紙	つ	か	、	け
入	こ	入	此	は
の	か	つ	時	は
奥	ら	と	ル	つ
に	、	。	つ	て
別	責	先	い	笑
に	て	月	二	れ
紙	此	は	三	る
に	内	都	日	な
包	十	合	前	と
あ	圓	が	に	言
で	ど	裏	聊	う
入	け	て	か	て
れ	は	送	ば	送
て	送	金	かり	つ
置	ら	し	原	し
い	う	、	ば	。

十行

今

十行二十

さ	で	切 <small>き</small>	何 <small>なん</small>	何 <small>なん</small>
、	、	り	と	じ
且 <small>かつ</small>	お	に	ど	か
那 <small>な</small>	系 <small>けい</small>	こ	く	甚 <small>しん</small>
、	さん	か	躊 <small>ちゆう</small>	で
お	ん	か	躊 <small>ちゆう</small>	け
強 <small>ちゆう</small>	が	こ	せ	聊 <small>りやう</small>
い	お	意 <small>い</small>	ら	の
向 <small>きゆう</small>	を	意 <small>い</small>	れ	羽 <small>う</small>
を	を	を	一	羽 <small>う</small>
と	を	表 <small>へい</small>	一	ま
徳 <small>とく</small>	と	し	方 <small>ほう</small>	ぬ
利 <small>り</small>	し	こ	で	や
の	て	く	、	う
口 <small>くち</small>	持 <small>ぢ</small>	て	夫 <small>ちゆう</small>	ぢ
を	う	耐 <small>たい</small>	後 <small>ご</small>	気 <small>き</small>
向 <small>むか</small>	て	う	何 <small>なん</small>	ら
け	来 <small>き</small>	な	じ	し
た	て	い	か	て

今

ま	つ	此	
い	て	年	
あ	あ	紙	
ら	と	で	
が	父	見	
見	の	し	
放	病	と	
し	氣	大	
こ	は	し	
め	其	事	
で	後	で	
は	甚	は	
無	ど	な	
い	可	い	
け	し	と	
れ	く	思	
ど	な		
、	い		
白	。		

平凡(六十)

ニ甚ホウ

り	奮	を	め	の
に	奮	讀	こ	柿
懐	り	む	男	世
しく	立	む	い	運
く	つ	む	が	言
、	て	む	、	規
何	み	す	不	の
ど	と	す	思	や
か	氣	と	議	う
泣	か	同	事	に
き	急	時	に	思
た	ち	に	は	つ
い	ま	、	、	て
や	ま	今	此	鼻
う	え	夜	時	で
ぞ	て	こ	此	遇
氣	、	を	事	う
お	校	は	紙	う
務	母	と		て
に	が			
	切			

十行二十

私	と	次	私	分
は	文	弟	子	分
孝	証	互	會	は
行	ご	柿	ひ	影
い	。	行	た	う
の		行	か	別
何		行	つ	底
ど		行	て	も
か		行	あ	直
泣		行	さ	ら
き		行	る	ぬ
た		行	だ	と
い		行	。	覺
ふ		行	母	情
事		行	の	し
と		行	手	て
い		行	で	、
ふ		行	狼	切
事		行	紙	り
と		行	御	に
道		行	覧	
学		行		
先		行		
生		行		

ん	母	持	合	ら
に	に	ら	も	れ
迷	對	て	喚	て
つ	して	帰	ぞ	も
て	も	らん	愛	不
か	而	ん	から	覺
ら	目	で	ら	急
	ない	は	う	つ
教		如何	今	て
る		に	度	り
無	と	親	こそ	の
理	い	子の	は	じ
を	つ	間	多	か
仕	て	でも	少	ら
書	お		の	
し	系		金	家
と	さ		を	の
今				都
日				

十行二十

た	河	劇	た	ぢ
。	も	の	が	ら
父	さ	費	か	て
が	か	用	ら	。
二	ら	が	ら	儘
病	し	思	や	に
氣	懐	つ	う	に
に	中	こ	と	ぢ
掛	が	よう	出	ぢ
つ	甚	も	感	ら
て	じ		す	す
か	輕	出	す	ぐ
ら	く	あ	め	に
	ぢ	で	は	も
今	ら			ぢ
を	て	吃	今	ち
送	お	より	日	た
金	る	事	の	か
を	事	裁	初	つ
通				

今

遠慮 <small>えんりよ</small> する	入 <small>いり</small> つて	うお休 <small>やす</small> み	糸 <small>いと</small> とん	と、
の	又 <small>また</small> 富 <small>とみ</small> と	み	ど。	先 <small>まづ</small> 刻 <small>とき</small> を
だ	富 <small>とみ</small> と	み	富 <small>とみ</small> と	待 <small>まち</small> た
つ	跡 <small>あと</small> を	つ	富 <small>とみ</small> と	懐 <small>なつか</small> か
た	開 <small>ひら</small> け	つ	富 <small>とみ</small> と	わ
か	め	つ	富 <small>とみ</small> と	た
も	め	つ	富 <small>とみ</small> と	た
知 <small>し</small> れ	め	つ	富 <small>とみ</small> と	た
ぬ	め	つ	富 <small>とみ</small> と	た
が	め	つ	富 <small>とみ</small> と	た
私 <small>わたくし</small> は	十二	み	小 <small>こ</small> 時 <small>とき</small> で	今 <small>いま</small> は
一 <small>ひと</small> 寸 <small>すん</small>	時 <small>とき</small> 過 <small>あ</small> ぎ	中 <small>なか</small> へ	小 <small>こ</small> 時 <small>とき</small> で	忘 <small>わす</small> れ
	で	中 <small>なか</small> へ	小 <small>こ</small> 時 <small>とき</small> で	て
		中 <small>なか</small> へ	小 <small>こ</small> 時 <small>とき</small> で	あ

十行二十

子 <small>こ</small> を	で	ふ	後 <small>うし</small> も	此 <small>こゝろ</small> 頃 <small>ころ</small>
は	凝 <small>ちひ</small> と	ふ	も	、
け	ろ	ら	い。	も
る	へ	ん	。	う
者 <small>もの</small> が	て	が	明 <small>あ</small> 日 <small>ひ</small> の	一 <small>ひと</small> 文 <small>ぶん</small> の
あ	あ	と	朝 <small>あ</small> の	融 <small>ゆう</small> 通 <small>つう</small> の
る	と	當 <small>とう</small> 惑 <small>わく</small> の	二 <small>ふた</small> 番 <small>ばん</small> か	餘 <small>よ</small> 地 <small>ち</small> も
か	ス	眼 <small>まなこ</small> を	三 <small>さん</small> 番 <small>ばん</small> で	ぎく、
ら	う	を	是 <small>こゝ</small> 川 <small>がわ</small> が	又 <small>また</small> 後 <small>あと</small>
眼 <small>まなこ</small> を	と	開 <small>ひら</small> き	北 <small>きた</small> が	作 <small>つく</small> ら
開 <small>あ</small> いて	言 <small>こと</small> を	て	た	
見 <small>み</small> る	偷 <small>ぬす</small> ち	衣 <small>え</small> の中 <small>なか</small>		
	で	中 <small>なか</small>		

今

別
わ

十行二十

今	は	わ	や	め
日	は	ね	う	め
は	は	え	に	め
日	は	と	私	め
日	は	私	の	め
だ	は	と	席	め
か	は	親	の	め
ら	は	を	側	め
、	は	看	に	め
帰	は	合	聖	め
つ	は	せ	り	め
て	は	て	や	め
か	は	微	が	め
ら	は	突	ら	め
湯	は	し	、	め
入	は	こ	好	め
			か	め
			つ	め

めめ
心指
に思つて

今

か	あ	こ	あ	つ
し	あ	め	あ	と
く	あ	を	あ	と
て	あ	着	あ	見
、	あ	、	あ	え
此	あ	扱	あ	て
人	あ	を	あ	、
に	あ	グ	あ	目
は	あ	ル	あ	立
調	あ	く	あ	と
和	あ	、	あ	め
が	あ	巻	あ	程
好	あ	に	あ	に
い	あ	し	あ	世
。	あ	、	あ	帯
	あ	上	あ	と
	あ	に	あ	化
	あ	不	あ	粧
	あ	。	あ	て

美 <small>うつく</small>	て <small>と</small>	伯 <small>と</small>	七 <small>しち</small>	何 <small>なに</small>
しい	何 <small>なに</small>	母 <small>はは</small>	大 <small>おほ</small>	何 <small>なに</small>
いと	何 <small>なに</small>	母 <small>はは</small>	草 <small>くさ</small>	ど
いふ	可 <small>よ</small>	の	吸 <small>す</small>	か
より	笑 <small>わら</small>	小 <small>こ</small>	付 <small>つ</small>	ま
りば	い	言 <small>こと</small>	け	な
仇 <small>あだ</small>	で	言 <small>こと</small>	フ	に
ッ	せ	詞 <small>ことば</small>	ウ	に
ま	し	に	と	く
くて	笑 <small>わら</small>	聞 <small>き</small>	煙 <small>けのり</small>	く
	笑 <small>わら</small>	え	を	く
男 <small>をとこ</small>	笑 <small>わら</small>	たり	吹 <small>ふ</small>	き
な	し	何 <small>なに</small>	き	が
し	所 <small>ところ</small>	かし	が	ら
と	は			

柳やなぎ 濟すけ まないけど

6

十行二十

懐 <small>いだ</small>	眼 <small>め</small>	腰 <small>こし</small>	上 <small>うへ</small>	一 <small>ひと</small>
かしい	前 <small>まへ</small>	に	の	本 <small>ほん</small>
い	に	手 <small>て</small>	巻 <small>まき</small>	頂 <small>たか</small>
女の	雲 <small>くも</small>	伸 <small>の</small>	草 <small>くさ</small>	戴 <small>たい</small>
香 <small>か</small>	を	ば	を	よ
が	敷 <small>敷</small>	す	取 <small>と</small>	し
茶 <small>ちや</small>	く	時 <small>とき</small>	ら	し
と	二 <small>ふた</small>	仰 <small>あやう</small>	ろ	し
す	の	向 <small>むか</small>	と	し
る	腕 <small>うで</small>	ま	し	て
	が	さ		
	近 <small>ちか</small>	は	袂 <small>そで</small>	枕 <small>まくら</small>
	く	て	を	え
	と	み	叩 <small>たた</small>	の
	見 <small>み</small>	ら	一 <small>ひと</small>	机 <small>つくえ</small>
	え	私 <small>わが</small>	及 <small>およ</small>	の
	て	の		

今

り
わ

6

十行二十

う	ボ	ン		い
て	ン	く	一	ふ
も	と	く	つ	の
	い	時	ニ	は
お	ふ	計	つ	甚
糸		が	芝	う
さん	肝	肝	床	い
は	肝	癪	の	人
一	一	起	を	を
向	時	し	して	婦
平	じ	と	み	の
氣	じ	や	と	か
で		う	と	と
	一	に		
咽	時	ジ		男
喉	じ	リ	下	り
が	を	く	の	れ
乾	打		ボ	た。

今

今	と	か	り	何
朝		何	何	と
か	母	か	か	と
ら	の	す	して	か
う	辛	る	て	り
今	紙	め	落	ら
夜	で	を	着	て
こ	一	待	いて	
そ	時	つ	て	新
は	著	て	る	の
御	え	る	る	湯
ち	に	や	所	吞
今	氣	う	は	で
が	が	に		白
其	又	も	何	湯
時	振	思	ど	を
じ	起	け	か	飲
と	ら	れ	私	む
思	て	ぬ	が	じ

る	に	み	に	に
と	し	ら	おど	、
	い	：	けう	私 <small>わたくし</small>
急 <small>きふ</small>	小 <small>こ</small>	其 <small>その</small>	す	の
に	事 <small>こと</small>	時 <small>とき</small>	す	着 <small>き</small>
何 <small>なん</small>	が	男 <small>おとこ</small>	の	て
と	鳥 <small>とり</small>	い	こ	ら
も	新 <small>あらた</small>	掛 <small>か</small>	し	夜 <small>よ</small>
言 <small>い</small>	の	け	と	着 <small>ぎ</small>
へ	や	ず	私 <small>わたくし</small>	の
ぬ	う		の	上 <small>うへ</small>
厭 <small>いと</small>	に	親 <small>おや</small>	而 <small>か</small>	に
な	私 <small>わたくし</small>	が	を	任 <small>まか</small>
心 <small>こころ</small>	の	大 <small>たい</small>	見 <small>み</small>	小 <small>こ</small>
時 <small>とき</small>	頭 <small>あたま</small>	病 <small>びやう</small>	て	夥 <small>おほ</small>
に	を	ど	笑 <small>わら</small>	う
ら	探 <small>たず</small>	の	つ	て
	め	に	て	

7
十行、三十

さ	読 <small>よ</small>	家 <small>いへ</small>	か	ふ
執 <small>と</small>	ら	が	し	と
つ	し	遠 <small>とほ</small>	も	、
て	く	方 <small>かた</small>	常 <small>とこ</small>	漫 <small>ま</small>
引 <small>ひ</small>	言 <small>い</small>	た	読 <small>よ</small>	心 <small>こころ</small>
引 <small>ひ</small>	け	か	ら	に
と	れ	ら	し	り
	ど	治 <small>と</small>	く	う
		つ	い	て
お		て	ふ	、
系 <small>い</small>	も	ま	と	私 <small>わたくし</small>
さん	う	ま	う	が
は	読 <small>よ</small>	せ	さ	泡 <small>あ</small>
引 <small>ひ</small>	め	う	う	つ
引 <small>ひ</small>	と	か	で	て
れ	卒 <small>つひ</small>	と	す	か
る	然 <small>しか</small>	矣 <small>や</small>	ね	な
儘 <small>まま</small>	手	常 <small>とこ</small>	え	い

空あら

ふ	ア	休	す	て
ッ	燈	み	わ	あ
と	火	ぢ	ぬ	し
火	を	こ	え	の
を	消	い	び	で
吹	し	ま	れ	ア
く	て	し	れ	本
息	ま	合	も	當
の	す	解	う	に
言	よ	して	行	お
か	し	て	つ	眠
し	い	起	て	い
た	ふ	上	痛	め
。	解	つ	せ	に
と	と	こ	う	お
、	共	様	。	邪
何	に	子	。	魔
物	に	で	お	で
か				

8

十行二十

笑	方	お	歌	て
つ	は	系	に	、
て	今	さん	に	私
あ	夜	ん	ら	は
し	け	は	う	胸
が	後	執	て	の
、	程	ら	后	痛
私	如	れ	と	む
が	何	と	か	や
何	う	手	分	う
時	し	を	ら	に
経	て	常	な	顔
つ	ら	と	か	を
て	ッ	誰	つ	顔
も	し	し	こ	み
眼	や	て	の	め
を	る	、	た	た
睨	よ	責	ら	け
つ	と		う	れ



今

10
人

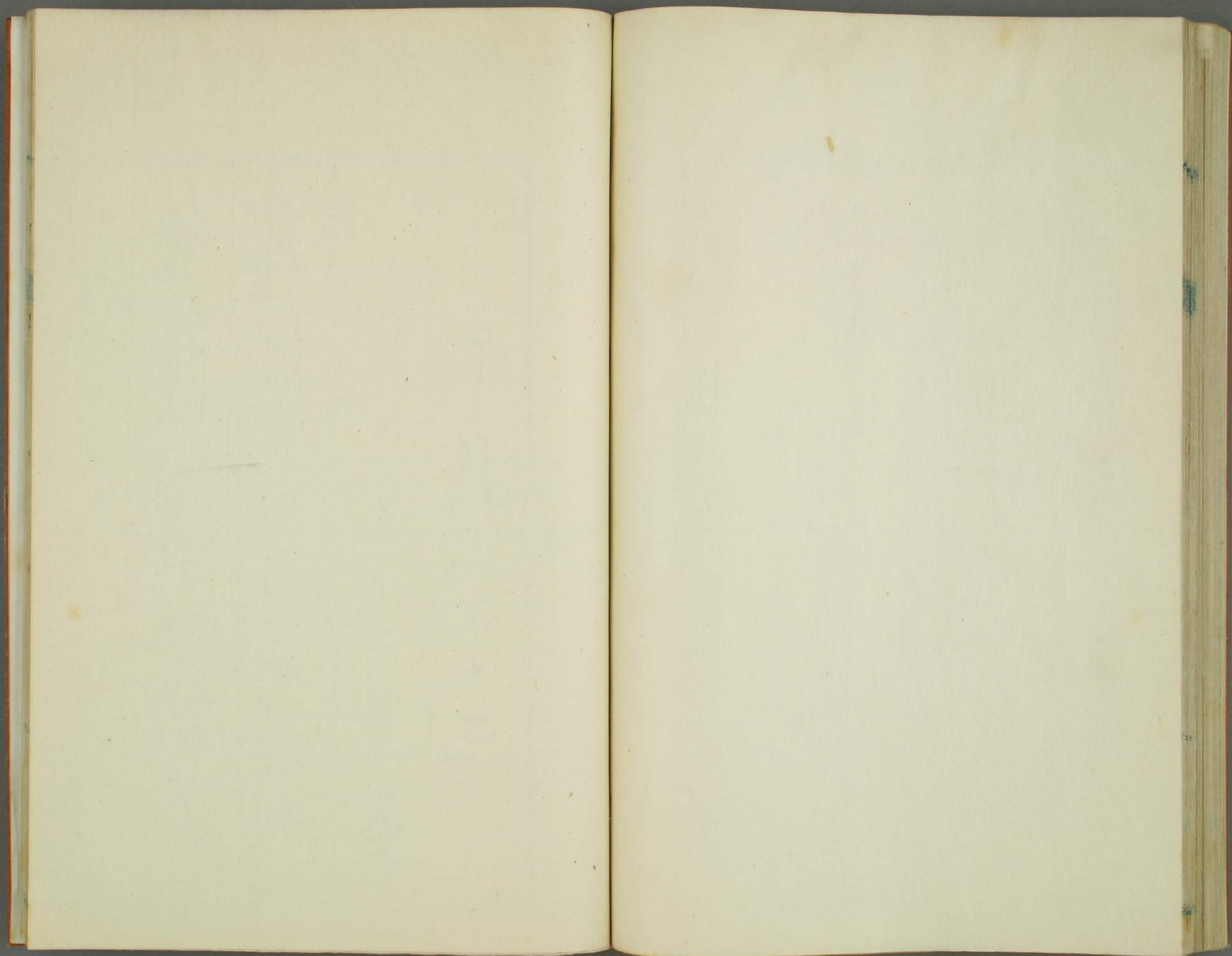
竟何物ぞと、
嗚呼おは大病で氣にかゝつて
居るのに、

9

十行二十

ク	出	ひ	微	私
ウ	し	じ	か	の
ク	て	小	か	向
と	み	片	頰	の
し	と	が	に	上
て	こ	耳	解	に
前	の	え	れ	露
後	腕	で	憎	さ
を	を	す	ら	し
忘	痛	ま	しい	や
れ	か	ま	い	う
人	振	夜	よ	で
間	ら	着	し	温
の	れ	の	も	か
道	と	上	と	な
義	時	に	笑	息
畢	私	授	を	が
	は	け	含	

今



主命 <small>いひから</small>	長 <small>ヤ</small>	後 <small>あ</small>	平 凡 (六十三) 二 葉 亭
命 <small>い</small>	カ	で	
任 <small>い</small>	セ	後 <small>ご</small>	
方 <small>い</small>	ズ	く	
か	に	い	
な	先	て	
い	ん	見 <small>み</small>	
と	い	と	
言 <small>い</small>	ダ	と	
つ	事	父 <small>ちち</small>	
て	情	ほ	
録 <small>い</small>	を	弦 <small>げん</small>	
女 <small>に</small>	知	と	
を	らん	石 <small>いし</small>	
吳 <small>い</small>	人	彦 <small>ひこ</small>	
丸	は	彦 <small>ひこ</small>	
と		彦 <small>ひこ</small>	
け		彦 <small>ひこ</small>	

つ	く	心	上	私
と	氣	機	京	、
。	も	が	し	父
世	無	一	て	の
時	く	精	、	妻
。	や	し	東	を
女	う	て	京	濟
の	と	は	で	せ
妻	か	、	一	か
性	う	彼	戸	ら
も	女	女	を	、
女	金	に	成	、
て	で	女	し	、
知	キ	に	こ	、
つ	を	関	。	世
と	切	係	も	を
が	つ	し	う	奉
、	て	て	斯	い
。	了	み	う	て

十行二十

と	に	び	全	れ
母	思	ら	く	ど
ど	け	れ	私	、
け	れ	る	の	私
に	て	所	の	に
け	ず	を	わ	は
家	ら	む	得	如
う	ず	ご	で	行
苦	か	、	、	し
学	つ	深	、	て
を	た	く	、	も
掛	か	年	、	然
け	ら	末	三	さ
し	う	の	年	う
く	、	不	や	日
ぞ	責	孝	四	名
い	て	を	年	一
と	生	悔	は	な
思	残	い	生	ら
	つ	跡	迄	、

今

思	つ	ら	せ	作
つ	て	評	心	と
て	来	判	持	讀
	る	別	で	ひ
或	も	版	て	で
年	い	く	不	見
意	し	を	慮	て
を	此	ち	而	も
決	心	し	重	、
し	ら	シ	山	矢
て	が	ン	物	後
文	思	外	の	馬
壇	叩	れ	出	鹿
を	り	ど	た	ら
去	時	用	し	し
つ	い	田	い	い
て	ら	難	い	。
	う	に	か	此
人	と	や	か	松

鹿	に	で	人
ら	親	後	の
し	し	生	言
く	ま	来	ふ
て	う	始	所
些	と	て	は
三	し	積	此
と	と	喜	處
し	が	而	構
書	、	目	ら
け	も	に	と
な	う	や	。
い	小	ら	志
	説	て	か
歐	も	井	し
米	何	比	其
の	じ	筆	が
名	か	筆	ぞ
家	馬	硯	
の			

ぼ、
 意味の
 方々
 やうな、
 無いやうな、
 詳の

愛の一念に任して、
 其を所依にして
 是れ

これで満足だ。
 妻子は全く可愛い。
 そのう

れてヒクウと生きをめるの
 だが、
 私には

だ、
 私に
 今も
 斯うして
 妻子の愛に
 縛こ

十行二十

つし。
 ま
 其後母の希望を容れて、
 妻を迎へ、
 子を

の周旋で
 今更
 後所
 勤め、
 やうに
 ぞう

問もなく母も父の
 跡を
 追つて
 行く

今更
 今更
 今更
 今更

今

ル	あ	て	う	實 <small>じつ</small> 感 <small>かん</small>
ま	や	始 <small>はじめ</small>	ぬ	で
か	け	始 <small>はじめ</small> 絶 <small>ぜつ</small>	あ	試 <small>し</small> 験 <small>けん</small>
つ	て	空 <small>くう</small> 想 <small>そう</small>	じ	験 <small>けん</small> と
こ		の	と	せん
め	終 <small>しゆう</small>	中 <small>ちゆう</small>	れ	と
だ	局 <small>きよく</small>	に	い	い
	が	漬 <small>つけ</small>	の	い
今 <small>いま</small>	ま	つ	に	い
終 <small>しゆう</small>	く	て	早 <small>はや</small>	い
高 <small>たか</small>	ま	め	く	の
月 <small>つき</small>	ら	し	か	性 <small>せい</small>
に	て	か	う	性 <small>せい</small>
や	二 <small>ふた</small>	ら	文 <small>ぶん</small>	す
ん	面 <small>めん</small>	人 <small>ひと</small>	学 <small>がく</small>	う
の	目 <small>め</small>	間 <small>ま</small>	に	よ
ほ	に	が	際 <small>はし</small>	く
	な		つ	か

十行二十

る	私 <small>わが</small>	て	分 <small>ぶん</small>
ま	え	行 <small>ゆく</small>	ら
い	来 <small>きた</small>	か	ん
と	実 <small>じつ</small> 感 <small>かん</small>	れ	浮 <small>う</small>
空 <small>くう</small>	の	へ	世 <small>よ</small>
疎 <small>そ</small>	人 <small>ひと</small>	て	に
に	で	見 <small>み</small>	れ
ぢ		と	ど
う			
男 <small>おとこ</small>	始 <small>はじめ</small> 絶 <small>ぜつ</small>	陣 <small>じん</small>	如 <small>ごと</small>
ど	空 <small>くう</small> 想 <small>そう</small>	一 <small>いつ</small>	何 <small>なに</small>
	で	生 <small>せい</small>	に
	心 <small>こころ</small> を	い	か
	きり	ら	斯 <small>ごと</small>
	り	ら	う
	て	ら	に
		ら	か
		ら	泣 <small>な</small>
		ら	つ

し	作家	の	性	ら
場	が	作	命	な
所	が	品	と	い
に	直	に	す	。
も	接	現	す	人
せ	に	け	し	の
よ	人	れ	の	嘴
、	生	る	、	で
字	に	自	や	割
形	解	然	う	く
で	れ	や	に	と
之	自	人	思	、
を	然	生	は	ぞ
井	に	は	れ	う
現	解	、	る	や
さ	れ	假	。	ら
せ	て	令	文	空
る	実	へ	学	想
	感	ば	上	を

ト
の

十行年

文	が	こ	を	の	全
学	が	か	経	か	く
は	が	、	験	底	み
一	分	分	し	で	の
件	ら	う	ち	、	れ
め	や	い	か	仰	ん
何	い	。	つ	ち	じ
い			し	こ	時
小			ら	ぶ	に
物				の	経
ど			行	端	験
か			遠	と	し
			ら	思	こ
私			け	ふ	痛
に			て	。	印
ほ			行	彼	実
分			つ	実	感

今

や	か	に	ら	人
く	つ	ば	れ	生
ざ	と	か	ん	や
が	か	り	の	自
念	ら	漬	は	然
ど		っ	當	に
や	人	て	然	接
く	間	み	じ	し
ざ	が	て		と
に	い		私	や
ら	う	實	が	う
の	け	感	は	ま
は	て	で	終	切
		心	節	實
	ふ	を	う	な
	や	引	い	感
或	け	締	ふ	じ
は	て	め	感	の
必		な	じ	得
				え

十行ニ

品	ま	空	真	か
に	は	想	に	ら
ほ	何	の	遍	は
ど	處	分	つ	
う	に	子	て	
し	か	と	も	
て	遊	含		
も	び	む	本	
遊	が		物	
戲	あ	之	で	
分	る	に	な	
子		接	い	
を	仰	して	本	
含	ち	得	物	
む	文	る	の	
	学	所	氣	
現	上	の	心	
實	の	感		
の	作	じ		

今

8

ル
ロ
イ

十
百
十

ん。	忙 め	さ り ま せ ん。	し て 年 に 入 れ こ も の で	二 葉 夢 が 申 し ま す、 此 稿 本 は 祝 意 を 込 め
	れ り ま す が、	一 寸 お 話 申 に 電 話 が 印 ル こ	ご ざ り ま す が	
	教 に か が ご ざ り ま せ		は 千 切 れ て ご	

今

